



部門研究1 2003年度第1回研究会

日 時 / 2003年12月6日(土)

会 場 / 同志社大学 今出川キャンパス 光塩館地階会議室

発 表 / 月本 昭男(立教大学文学部教授)

コメント / 越後屋 朗(同志社大学神学研究科教授)

スケジュール

2:00~3:30 発表:月本 昭男「古代イスラエル唯一神教の成立とその逆説的特質」

3:30~3:45 休憩

3:45~4:00 コメント:越後屋 朗(同志社大学神学研究科教授)

4:00~5:00 討議

6:00~8:00 懇談会(自由参加)

研究会概要

一神教の成立をめぐるのは、多神教世界の中で止揚され一神教が誕生したとみる「宗教進化論」、そもそも原初の宗教が一神教であったとする「原始一神教説」など、様々に論じられてきた。しかし、唯一神教が宗教進化の最終段階か、それとも宗教の原初形態かという議論は実証不可能である。また歴史上の一神教が西アジアの乾燥地帯で誕生していることから、厳しい自然条件下で共同体のアイデアとしての「一なる神」への信仰が育まれたとする風土的解釈もされるが、古代西アジアにおいて多神教はごく一般的な現象であった。

そしてまた、古代イスラエル唯一神教の成立に関しては、古代メソポタミアの精神世界を旧約聖書に結びつける汎バビロニア主義、アマルナ時代のエジプトにおける宗教改革とヤハウェー神教を結びつける見解、ペルシア宗教が古代イスラエルの普遍的絶対一神観に影響を与えたとする解釈などがある。だが、いずれも十分な説得性を備えているとは言えず、ヤハウェー唯一神教の成立の解明には、自覚的な宗教運動を念頭に置き、古代イスラエル思想史を細心に跡付ける必要がある。

そもそも一神教とは、神という上位概念の存在を想定し、その属性の神顕現が多様であることを認めながら、その背景には統一的なものを持ち、神としてしか言い得ない統一的存在を受け止める「唯一神性論」である。これはきわめて自覚的な宗教意識であると言える。古代イスラエルにおいても、ヤハウェー専一運動と呼ぶべき、神ヤハウェのみを崇拜する潮流があった。これは政治や社会の変動とも関連する運動であり、王国時代においては、その自覚的担い手は、預言者、祭司たちであった。それらは王国滅亡後の捕囚期に理論化され、申命記学派の手によってイスラエルの民の歴史が編まれた。

近年の考古学的調査によって、当時のイスラエルの実情を窺い知ることができる貴重な碑文資料が複数発見されている。ヒルベト・エル・コムやクンティレット・アジュルドでは、「ヤハウェとそのアシェラ」という記述がみられ、また紀元前5世紀のアラム語の契約書からは、ヤハウェとアナト女神を祀っていたことがわかる(ピトス碑文)。これらの碑文資料は、当時のイスラエルが、実際には多神教世界であったということを物語っている。

イスラエルにおける唯一神教はこのような中で、少数のきわめて自覚的な人々によって提唱され育ま



れた。その特質は、初期イスラエルの神観を継承しつつそれを展開し、イスラエルがその「弱さ」ゆえに神から「選ばれた」とする点にある。これらのことを古代西アジアに位置づけるならば、一神教が、当時の強大国であったエジプトでも、アッシリアでもない、文化的にも政治的にも辺境であった弱小の民イスラエルの中に生まれたところに、その逆説性を見ることができよう。

また、その後のディスカッションでは、時代情況の役割割(手島勲矢大阪産業大学助教授)、一神教の概念規定の問題(B. ジクムンド同志社大学教授)などが取り上げられ、今後の課題として残された。



「古代イスラエル唯一神教の成立と その逆説的特質」

立教大学文学部教授
月本 昭男



同志社大学はあこがれの大学でございました。中学高校は群馬県の新島学園で学びました。学年に150名おります中で、1名か2名同志社大学神学部に推薦入学で入っております、私もぜひとも牧師になりたいと思ひまして同志社大学で学ぼうと決心していたのですが、高校二年の五月、同志社大学に行かれた先輩が戻ってこられまして、政治的なアジ演説をしたわけです。同志社大学で左翼の洗礼を受けて帰ってきたらしく、田舎の学生で社会意識もない、ただ牧師になりたいと思っている私にはショックでありまして、同志社にいったらどうなってしまうのか。やめた方がいいんじゃないか思っていたわけでありまして。その後、キリスト教の勉強はドイツに行った方が良いのではないかと。その頃、ドイツ語講座をされていた早川先生に手紙を書いたわけです。「ドイツでキリスト教の勉強をしたいがどうしたらいいか」。そうしたらおハガキをくださって「高校を卒業してもドイツの大学には入れません。日本の大学に行って教養課程まで終えることです」と。高校二年の時、クラスの担任の先生に相談しますと「君たちの学年は近年になく勉強ができるものが揃っている。君もその一人だ。東京大学を受けたまえ」「キリスト教の勉強かできるでしょうか」「できるはずだ、大丈夫だ」と。それでキリスト教を勉強するために大学に入りました。

私の父親は朝鮮出身でございまして、大正末期に日本に来たのだと思いますが、さまざまな事業を、学問とは関係ない仕事をしておりまして、太平洋戦争末、すべての事業を放棄して「自分は今までい

ろんな人を騙し、騙されてきた。自然は人を騙すことはない」と蜜蜂を飼うことになりました。子どもの頃から蜜蜂と一緒に南は知多半島、渥美半島から新潟、福島と花を追いかけて過ごしました。そういう親ですから、手に職をつけるような勉強をせよということでしたが、それには従いません、キリスト教の勉強をしたいと思っております。そのはずが、新約聖書、旧約聖書、オリエントまで行ってしまひましてキリスト教から少し離れたなという感じもいたしますが、キリスト教、一神教については多少とも関心を持ちまして、いくつか論文なども書いてまいりました。

一神教に関心を持ちましたのは二つくらいの理由があったと思います。一つは立教大学に勤め始めた頃に梅原猛先生がキリスト教の人間中心主義、一神教の問題を採り上げておられました。二点くらい大きな問題としてあったと思います。一つは一神教における環境問題だったと思います。神が創造した自然、その中に人間を支配者として位置づける。これは創世記1章ですが、キリスト教の人間中心主義が、人間の生活の快適さ、便利さのために自然を利用しても構わないという考え方が生まれ、それが今日の世界規模での自然破壊、環境汚染の思想的な元凶になっている。それに対してアジアでは、人間を自然の一部としてとらえ、人間と自然の融合を最高の精神境地として受け止めてきた東洋の思想をもう一度見直すべきだという主張をなされておりました。私は立教大学で聖書の講義をしておりますから、それに対してどう答えるべき



かということが私の課題となりました。その後、梅原先生は一神教、多神教と点において多元論を主張されていたと思います。多元主義社会に対して一神教的な一元論ではだめである。多神教的な考え方を見直さないといけないと。梅原先生のご主張の問題点は、今、指摘するまでもないと思いますが、それを学生に対してどう教えるか、私なりに受け止めた課題でありました。

もう一点は、ゼミの学生たちに「初詣に行ってきたか。どこに行ったか？」と聞きますと、ほとんどが神社だと答えます。しかしどんな神様が祀られているか誰も知らない。神社にはそれぞれ祭神があるはずですが、神社に行つて手を合わせるのに祭神の固有名詞、例えば「猿田彦の神様お願いします」と手を合わせることをしないことに気づきました。日本は多神教だと言われますが、考え直した方がいいのではないかと強く感じたわけです。同じように仏教においても仏様に手を合わせる。それが仏の像か、菩薩の像か。様々な固有名詞があると思いますが、観音様や地藏様などに対して、ほとんどの日本人は「仏様」という形で手を合わせる。日本の宗教風土を単に多神教とっていいかどうか、と強く感じておりました。そういう個人的な関心から一神教の問題を考えてみたいと思ったのがきっかけであります。

議論のきっかけにさせていただく意味で発題をさせていただきます。

まず一神教をめぐるのは宗教史学でさまざまに論じられてきております。古くは宗教自然史のヒューム、ヴォルテール、ルソーの時代から、キリスト教世界にキリスト教以外の宗教が情報として寄せられるようになってから、一神教が先なのか多神教が先なのかという議論がございました。ヒュームやルソーは多神教が古いという立場をとりましたが、ヴォルテールは一神教の方が先だと主張したのであります。これらは学問的な体裁をとるには余りにも素朴だったと思いますが、19世紀半ば頃から宗教研究が神学とは

独立した形で唱えられるようになってきました。19世紀半ば頃からヨーロッパ世界、遅れては日本にも入ってきた進化論的な考え方が、宗教の発展にも援用されることになりまして、宗教の起源がさまざまに探られ、宗教の進化が論じられました。これが宗教進化論と呼ばれるものであります。宗教進化論の立場に立つ研究者たちは、多少のニュアンスの違いはありますが、おしなべて一神教を宗教の最も進化した形として受け止めていたのであります。

宗教進化論的な考え方は当然旧約聖書、古代イスラエルの研究にも無関係ではなく、宗教の進化という枠組みで旧約聖書、ヘブライ語聖書の研究もなされてまいりました。ヴェルハウゼン(Wellhausen)、ロズ(Lods)などが宗教進化論の代表的な人たちです。19世紀終わりから20世紀はじめにかけて宗教進化論的な枠組みで古代ユダヤ教の展開を考える論調が強くなりました。しかしまたそれに一部先立ちまして、人類の宗教の起源は一神教だという主張も根強くありました。ヴォルテールもそのような主張ですが、意外なことに『イエス』の著作で知られていますルナン(Renan)が、セム族の原始一神教的な考え方をすでに19世紀半ば頃に唱えているのであります。ラングランジュ(Langrange)などもセム族の宗教は出発点から一神教であると述べております。そういう流れに立って、学問的な装いを持って人類は原始一神教徒であったという説を展開したのはラング(A.Lang)であり、それに続くシュミット(Schmidt)神父であります。とりわけシュミット神父の『神観念の起源』という膨大な書物は、これを読み通した日本人の学者はいないのではないかとおもわれますが、書物の全体の主張は原始人類は一神教徒であったということでございます。世界の文化、文明の程度を細かく分け、よりプリミティブなところに行けば行くほど、目に見える世界を超えた超越的な天空にある神への信仰が濃厚に見えてくる。これがシュミットの基本的な論であったように思います。



そうした原始一神教説を今日そのままの形で主張している研究者はおりませんが、私が見る限り、旧約聖書学の中に忍び込んでいると思われまゝ。オルデンベルク(Oldenburg)の立場がそうであります。私の見方が間違っていなければ、ハーバード大学の高名なクロス(F.M. Cross)などもイスラエルの宗教の背後にセム的な原始一神教の信仰形態を見ているようであります。イスラエルの神、「主」、これはヘブライ語で「ヤハウェ」と申しますが、クロス学派はヤハウェの起源について「ヤハウェ・エール」を考えます。「ヤハウェ」というのはハーヤーという「ある」という、実際には使役で使われないのですが、動詞の使役形である。それに「エール」というセム族の至高神がつく。それが元の型である。つまり「ヤハウェ」という名前は「神あらしめ給う」という意味だと主張します。しかもこの「神」は大文字の「神」です。その主張は少なからずクロス学派に受け継がれていると思います。その背後にルナンまで遡りうるようなセム族原始信仰説が流れているように思われるのであります。

いずれにしても一般論として進化論と原始一神教説が20世紀はじめ拮抗しておりました。原始一神教の方がマイナーであったと思います。二つの説は同じような問題点を抱えていると思います。一つは理論的には空間を安易に時間に置き換えてしまっていることであります。つまり現代世界のより原始的なところに人類のより古い宗教形態が見えるという論であります。それに対して私は大きな疑問を感じるのであります。何よりもまずアフリカや中南米、アジア等々の未開社会と言われるところに人間の古い時代の生活形態が残っているという見方に反対でありまして、アフリカなどのある部族は、都市化社会を拒絶しながら、それとは距離をおいて別の生活をする形態は十分ありうると思います。また、西アジアにおいてシリア政府が遊牧民を何とか定住させたいので、無償でコンクリートの家を建てて提供しました。遊牧の民は感謝したが、羊を

夜、入れるのにいいとその家を用いたという笑い話がございます。人間の生活様式はそのように単線的に展開していくものではないのではないかと私は強く感じます。そして何よりも文明のレベル、程度を西側の視点からどの文明が、より原始的なのかという発想自体が、今日さまざまな形で再考が求められているに違いないと思います。石器時代、金属を使わない社会よりも金属を使う社会の方が本当に進んでいるのかどうか。今日、お年寄りに優しい社会、女性を差別しない社会の視点から見ると、今までの文明の進歩という見方は全く違うふうに見えてくるはずであります。そういう点で、宗教進化論、原始一神教説、これらは説としては面白くありましても、多くの問題点を抱えていたと言わざるを得ません。なによりも証明の限りでないということがございます。

そういう中で一般論として少なからぬ賛同者を集めたのが、一神教＝創唱宗教説であります。古くはRGGの一版のグレースマン(Greßmann)などが、モーセをユダヤ教の宗教の創唱者だと言っています。これを理論的に広めたのはペッタソーニ(Pettazoni)の論文であります。1954年、ブリル(Brill)から出た『宗教史論集』に巻頭論文として一神教の形成というものが入っています。そこで彼が主張するのは、一神教というのは進化の過程で生まれてきたものでもなければ原始一神教でもない。常に一神教は創唱者がいるのだという論でありました。イスラームにはムハンマドが、キリスト教にはイエス・キリストが、ユダヤ教にはモーセが、ゾロアスター教にはゾロアスターがいるわけであります。こういう見解は古代イスラエル研究にも陰に陽に影響を及ぼしてしまっていて、古くはバールシャイト(Balscheit)のものがございますが、その後ではオルブライト(Albright)がユダヤ教はミッシヨナリー・レリジョンだと強く主張しています。イギリスの旧約の大家であったローリー(Rowley)などはモーセ時代にイスラエルの一神教がプラクティカル・モノラト



リーから始まったと主張しています。南アの高名なラブシャーニュ(Labuschagne)もそのような立場に立っております。

しかしこの説の問題点は少なくないと思います。ゾロアスター教を一神教に含めるかどうかは一神教の定義の問題にもなりますが、キリスト教では、イエスは「神はただ一人である」と言っておりますが、イエスはおそらくユダヤ教徒として生きたのでありまして、神観念などはイエス以前のユダヤ教に遡ります。またイスラームの専門の先生方に伺わないと安易なことは申せませんが、ムハンマドのアッラーは唯一だという言い方にしても、その前提に、周囲にキリスト教徒、ユダヤ教徒もおりましたし、イスラームの中にハニーファという一神教的運動があったと聞いております。そういう意味で創唱者という言い方ができるのでしょうか。特にキリスト教はどこから始まったかというのは難しいですが、私の理解によればキリスト教はイエスの十字架での死後始まったのでありまして、そういう意味でイエスは教祖とは言えない。なによりもユダヤ教の古代イスラエルにおいてはモーセという人物の歴史性が、ようとしてわからないわけでありまして、少なくとも歴史学的に史的モーセを再構成することは全くできないのであります。

そういう点で一神教は創唱宗教だという見解に関しては宗教進化論、原始一神教説に対して唱えられたという意味で意味があったと思いますが、やはり大きな問題点を抱えているように思います。ただ評価できる点は一神教が自然発生的なものではなく、常に自覚的に宗教教説が語られないと一神教というのは維持されない、保持されないという点であろうかと思えます。

その他、一般論的な一神教理解を挙げてみました。一つは風土論的なものもござります。和辻哲郎は名著『風土』の中で砂漠の宗教という言い方をします。一神教の成立をこれに結び付けはしませんが、少なくともユダヤ教的な、そしてイスラームに流れてい

く厳しい律法宗教と、砂漠の風土、乾燥地帯の風土と結び付けていることは確かだと思います。

地理学者の鈴木秀夫が『超越者と風土』の中で乾燥風土と一神教との内的関連を問うているわけでありまして。これはさきほど原始一神教説に入れた、ルナンの「セム族一神教」は遊牧的な生活様式と深く関係づけられているのでありまして、旧約研究者の中ではチューリッヒの大学の教授であったマーグ(Maag, V.)という人が「イスラエルの牧羊者」という論文などでユダヤ・旧約聖書の一神教的な神観念を遊牧世界と結び付けているのであります。この説の問題点はたくさんござります。まず乾燥地帯の西アジア地域は決して一神教の地域ではなかったということでありまして。シュメール時代、バビロニア、アッシリアは多少これから申し上げる問題点もござりますが、普通の用語では多神教世界でありました。ムハンマドがマッカに来て、一神アッラーの唯一性を主張するまではマッカは八百万の神々が祀られていた場所でありまして。風土論は意味がありそうで、実は根拠のない場合が多い。もしそうだとすると、なぜあの乾燥地帯で成立したイスラームが逆の風土のインドネシアにあれだけ広がるか説明できなくなるであります。風土論は説得力があるように見えて根拠が薄弱だと感じています。細かな批判で申しますと、クナウフ(Knauf)というジュネーブ大学の教授の「遊牧的な一神教はあるか」という論文があります。アラビアのヨルダン、シリア、サウジアラビアの砂漠の中の石にたくさんの碑文が刻まれています。サファ語とかハムド語、サムド語ですが、ここにはさまざまな祈願文が書きつけられています。それを論拠に遊牧民に決して一神教的な傾向がないということを主張しているのであります。

門外漢ではありますが、フロイト(Freud)の父親像の後裔として一神教の理解には触れておく必要があるだろうと思います。最近ではバッドクック(Badcock)が同じような立場から、社会形態、とりわけ部族社会的なものに一神教的な傾向がある



と述べております。しかし部族社会が一神教であるとは到底信じられませんし、深層心理学的に一神教をどう理解するかは私の手に余るところでございませぬ。

一神教をめぐる宗教史の一般論はございますが、どれ一つとして一神教を十分に説明する論になっていないというのが結論であります。一神教の概念そのものの再検討が迫られているということもありうるかと思ひます。比較的最近まで使われている一神教の用語は *monotheism*、*Kathenotheism*。“*Kathenotheism*”はマックス・ミュラーが初期に使った言葉で、後に彼は *henotheism* を使ひます。原典まで遡って確かめてはありますが、ある時代、多神教を前提にしながら崇拜の対象を一神に絞っていく。それが時代によって変わっていく。交代一神教という訳も使われているようであります。*monolatry*、*polytheism*、*monotheiotetism*。最後の“*monotheiotetism*”についてはシカゴ大学のオリエンタルインスティテュートに楔形文書の研究で神様と仰がれているベンノ・ランツベルガーというユダヤ系の学者がおります。優れた楔形研究者でしたが、彼が古代メソポタミア、とりわけアッシリア、バビロニアの神観念を問う中で *monotheiotetism* という概念を用いたわけだ。日本における多神教が本当に多神教かという問題提起と重なってまいりますが、古代バビロニア、アッシリアにおきまして神々をまとめる神という上位概念がある。そして神々の属性が複数の神々にわたっている。時に有力な神々が他の神々の属性をも自分の属性とて取り込むということ、そういうところに単なる多神教と言ひ切れぬ古代オリエンタルの神観念を見抜いたわけでありまして、彼はそれを“*monotheiotetism*”という用語で呼んだわけだ。どう訳していいか、私は「唯一神性論」と訳してはどうかと思ひます。神々として多様な現れ方をすけれども、その背後に神的なものとしては一つの統一的なものを理解している。そういう神観念であろうかと思ひます。

専門の分野ではありませんのでレジュメにも用意してまいりませんでした。古代エジプトの神観念を論じる時、一と多という言い方をいたします。考え方としては神々の現れ方はさまざまだが、その背後に、奥に神としてしか言いえない統一的な存在を受け止める考え方があるようだ。それとも通じるものではなからうかと思ひます。唯一神性論は言葉としてすぐ理解していただけないかと思ひますので、いい訳語があれば伺ひたいと思ひます。

以上、一神教の成立をめぐる諸議論を私なりに紹介して、問題点を指摘させていただきました。ここで、現実の一神教と言われている宗教、少なくとも歴史的には古代イスラエルの宗教に遡ります。古代イスラエルにおける一神教の成立、あるいはヤハウェ一神教、ヤハウェ唯一神教と呼んだほうがいいかもしれませんが、それについてのさまざまな議論をご紹介させていただきたいと思ひます。

まず最初は、古代イスラエルの一神教の成立は外部からの影響だという論であります。これにはいくつ論がございませぬ。一つは古代メソポタミアにおける一神教的傾向がイスラエルにも影響を及ぼしているという議論だ。19世紀後半から楔形文書が解読されて、ノアの洪水と同じ物語がそこに発見される等々、キリスト教世界でセンセーションを巻き起こしてきますが、その中で聖書の宗教はすべてバビロニア起源だという立場の研究者が少なからず登場しました。とりわけドイツを中心に登場しました。これを汎バビロニア学派と言ひしております。有名なのはバベル・ビーベル論争というのでありまして、バベルはバビロン、ビーベルは聖書でございませぬ。エレミアス(A. Jeremias)は汎バビロニア学派の一人で、バビロニアにすでに一神教的な傾向があったのだと論じております。この書物は私自身は見えておりませんが、ヴァイトマン(Weidmann)からの孫引きでございませぬ。ちなみにエレミアスは聖書学を専攻して、その子どもが新約聖書学の譬え話の研究で有名で、そのお孫さんと三代続いて広い意味での西ア



ジア学の研究が続いてる家系のごようでございます。汎バビロニア学派は少なくとも楔形文字等々の厳密な解読という点で厳密さを欠いておりましたから、旧約聖書学においてもバビロニア学においても、もはや問題にされてはいないと思います。しかしごく最近、別の形でその問題を採り上げている学者がおります。パルポラ(S.Parpola)というフィンランドのヘルシンキの研究者です。お兄さんはインダス文明の研究で有名な方です。彼はアッシリアの文書研究の世界の第一人者といっていいと思いますが、ヘルシンキでアッシリア・新アッシリア時代の文書の膨大な研究シリーズの指揮をとっている方です。パルポラは「古代アッシリアにおける唯一神教(Monotheism In Ancient Assyria)」という論文を書いております。やはりランツベルガーなどのmonotheiotetismの影響を受けているのではないかと思われませんが、アッシリアの神々はいろんな形で存在しているが、最終的にアッシリア出身のアッシュルに集中していく。そこにはっきりした一神教的な傾向が見られる。そういう傾向がシリアなどを介してイスラエルに影響を及ぼしているだろうと論じているのであります。しかし私の見る限り、無理な議論であるように思います。

次に、アマルナ時代の普遍主義という考え方については、そんなに広まっているわけではありませんが、ニューヨークのユダヤ教のオリエント学者のゴードン(C.H.Gordon)が唱えた説で、彼の著書『旧約聖書の世界』の五章に出ております。アマルナ時代は紀元前15世紀～14世紀にかけてであります。考古学的に言いますと後期青銅器時代ですが、第18王朝のイクナトン(アクナートン、アメンホテプ4世)という王がアトン信仰のみを主張して、エジプトのアマルナを新しく都にしました。そこから楔形文字で書かれた外交文書が300点近く発見されたのであります。その文書はメソポタミアのバビロニアとの通信だったり、アッシリアとの通信であったり、トルコ半島、小アジアに力を持ちましたヒッタイト帝国の

王との交信記録であったり、さらにはシリア、パレスチナの小国の領主たちとの交信記録であったり、それが300近く残っております。ちなみにエルサレムの領主からの手紙も複数残っています。イスラエル以前のエルサレムの都市国家、領主の名前までわかっています。アブディ・ヘパという領主の書簡も複数残っています。

ゴードンはアマルナ時代に西アジアにこのような交信記録が残されているということは、つまり精神的な文化交流がなされた時代であり、人類の歴史において最初のインターナショナルな時代なのだと申します。さらには旧約聖書のアブラハム、イサク、ヤコブ等々の物語モチーフとギリシャ神話に残ります物語モチーフとの共通性を指摘しまして、アマルナ時代こそ、人類最初の普遍主義が芽生えた時代だと。普遍主義の中にイクナトン(アメンホテプ4世)のアトン信仰・アトン一神教もあったし、その影響を受けてイスラエルにおける一神教が発達したという論を展開したのであります。ただこの論は、ゴードンの弟子たち以外には広まっておりませんで、その点、学説の人気としては広く認められていないようで、なによりイスラエルの一神教がアマルナ時代より少なく見積もっても数百年遅れるという問題があるように思われます。

それよりも、多くの人たちが主張しているのは、ペルシア宗教の影響であります。フォアレンダー(Vorlaender)の論がそうであります。彼はDer Monotheismus Israels als Antwort auf die Krise des Exilsという本を著しています。Exilはバビロン捕囚の意味でありまして、『バビロン捕囚時代の危機への応答としてのイスラエルの一神教』という題からわかりますように、バビロニア捕囚期にイスラエルが国を失って危機に陥る。その時期に一神教が芽生えていく。とりわけバビロニア捕囚の最後は、バビロニアが紀元前538年にペルシアによって征服されます。ペルシアの一神教的な宗教思想が大きく影響を及ぼしてイスラエルの一神教が



成立したという論です。トンプソン(Thompson)はデンマークの学者ですが、同様の論を展開しています。フォアレンダーの書物はラングの『唯一の神』という書物の中に邦訳として収録されております。

しかしこの場合に問題はペルシア宗教からの影響と一般論としては言いえても、この時期のペルシア宗教は明確に史料的に確認しにくいということがあります。後のペルシア宗教の教典のガーサという部分には古くゾロアスターまで遡るだろう部分が残ると言われておりますが、しかしその写本ははるか後代でありまして、古くともハムラビ文書で書かれたものですから、ササン朝以降になります。もう一つはこの時期、ペルシアはバビロニアを征服しまして、バビロニアの宗教そのものを認めていくという形になります。何よりもこの時期のペルシア(伝統的な言い方ではアケメネス朝ペルシャ)は寛容な宗教政策をとった。それがユダヤ教などを認めることになった。古代イスラエルのヤハウェー神教は排他的であることからしますと、そこで必ずしも一致していかない。事実イスラエルの一神教が、どの部分がどういう形でペルシア宗教の影響を受けたかとなると論者はあまり詳しく立ち入らないのであります。そういう点で、私の見る限り、マイヤー(Mayer)がイスラエルにおける一神教と、ゾロアスター教における一神教との相違を指摘しております。少なくとも古代イスラエル、旧約聖書には二元論はほとんど出てこないのであり、二元論の影響はずっと後代であります。我々の知っている文書でいうと、死海文書や、黙示文学などに二元論は出てまいります。その時点で光と闇、善と悪の二元論、ペルシア的なものが影響を及ぼした可能性は十分にあると思います。そこは認めたいと思っておりますが、旧約聖書には直接ペルシアの宗教が影響を及ぼしたということは認めがたいのであります。

そうしますと外からの影響というより、むしろ古代イスラエルの宗教の内的発展といいたいでしょうか、古代イスラエル思想史・宗教史という点から一神教を

見ていくべきではないかとなります。事実そのような研究が旧約聖書学において最も多いと思えます。最後にその点を述べさせていただきたいと思えます。宗教進化論もイスラエルにおける宗教の展開を論じたものでもありますが、その辺は先ほど述べましたので省略させていただきます。

さて異なる神観の融合もしくは止揚としての「ヤハウェー神教」という論であります。これはいろいろな研究者がとる立場で、一般的には例えばゲオルゲ・フォーラー、あるいは、邦訳が出ていますが、『歴史における古代イスラエルの信仰の歴史』を書きましたシュミット(W.H.Schmid)などの説がそうですし、日本では関根正雄先生もそういう説を受容しておりました。この論は初期のイスラエルにおいて三つの異なる神観が統合されて基本的なイスラエルの神観が成立したという考え方です。

第一は「父祖の神」というタイプでありまして、創世記のアブラハム、イサク、ヤコブの物語などに出てきます父祖、我々の父、先祖誰々の神という呼称を持つものです。1929年にアルデヒト・アルトという人が「父たちの神」という論文を残しまして、それ以来一般化したものであります。すなわち遊牧の民が、ある定められた聖所を持たずに、一定の土地に固着せずに遊牧の移動と共に動いていく神であり、そしてその神は固有名詞を持たず、その部族の族長の名前を持って呼ばれる。つまりアブラハムの神、あるいはイサクの神と呼ばれる。そういう神のタイプがある。これが古代イスラエルにおける最も古い神のタイプだと論じたのであります。その間接的な論証として、時代は下がりますが、遊牧の生活者が都市化していく中で残したナバティア、パルミラなどの碑文にこれに似た神の呼称を見いだしていた。これを父祖の神、私の先生方の世代は族長の神と呼びました。

第二が、出エジプトを果たした部族がもたらした「救済の神ヤハウェ」です。特に旧約、古代イスラエル史におきましては、出エジプトの歴史性は歴史学



的に確認できませんので、推測・想定するかしかないので、一般的にはイスラエルの後の部族の中のヨセフ族が出エジプト経験を持ち込んだのではないかとされています。その出エジプトの体験とヤハウェの神が密接に結びついているという、「救済の神ヤハウェ」です。

第三はカナンのお古からの至高神「エール」です。ウガリトの遺跡から文書が発見され、エールにまつわる神話的な文書も出てきました。

この三つの神が一つに融合する、統合されてくる。そこに古代イスラエルのヤハウェ一神教の基本的な神観念が成立したという論がありましたし、今でもそういう立場をとる研究者は少なくないと思います。

次にお話するのは、一神教は神々の融合ではなく、さきほど創唱宗教についてお話したときに触れたように、自覚的な宗教運動であるはずだという考え方です。スミス(M. Smith)には『旧約聖書を形成したパレスチナの諸党派と政治』という有名な優れた研究書があります。彼の影響を受けて、前にご紹介した邦訳になっているラングの書物ができたのであります。スミスは“Yahweh alone Movements(ヤハウェのみの運動)”、“Movements”と複数ですが、ヤハウェのみを崇拝するさまざまな潮流、運動があった、そういう中で一神教が成立してきたのだという論を展開したのであります。私はヤハウェ専一運動と呼びましたが、ヤハウェのみの宗教運動、あるいは政治もからむ宗教運動であります。どこから始まるか起点は難しいですが、王国時代には預言者の運動があり、祭司たちの運動があり、それがバビロニア捕囚期に理論化され、最終的にヤハウェ一神観が成立したという考え方です。この考え方に私も賛同、共鳴するところが多いのです。

それに対して旧約聖書で「神は唯一だ」とはっきり宣言されるのは申命記であります。申命記に「聞け、イスラエル」とありますが、そこで「我らの神、主は、ヤハウェは唯一だ」と宣言されるのであります。

申命記こそは律法の中で最もはっきりとヤハウェの唯一性を主張している書物です。ちなみにモーセの十戒の最初の部分が唯一神の宣言のように受け止められていますが、原文を読むとそうではないのであります。これは少しおかしな文章で、「私の前に他の神々があってはならない」あるいは「他の神が」と、どちらでもとれるあいまいな原文です。他の神の存在は認めるが、崇拝してはいけない。他の神の崇拝禁止が十戒の第一の主旨だと思います。他の神々を理論的に認めるという意味では唯一神の宣言ではないと言うべきです。それに対して申命記ははっきりと「我らの神ヤハウェこそ唯一だ」と宣言するのであります。申命記的な神学に基づいて、それ以降の歴史書が書かれていきます。ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記、バビロン捕囚までに至る歴史が書かれています。申命記こそ、これが古代イスラエルにおける一神教を確立させたのだという、申命記学派の理論がございます。ローゼ(Rose)という人はプロテスタントだと思いますが、ローフリンク(Lohfink)、ツェンガー(Zenger)、ブラウリーク(Braulik)まではカトリック陣営の研究者たちであります(レジュメ中の参考文献参照)。

それと並んで、イスラエルの一神教が後代だという説と関係してきますが、王国時代のイスラエルは多神教であったということが最近、さまざまところから主張されてまいります。代表的な研究者にスミス(Smith.M.S)の論者があります。この人は2001年にオックスフォード大学出版から『聖書の一神教の諸起源』という書物を出しております。スミスは王国時代のイスラエルの宗教は実態としては多神教であったということを述べるのであります。しかもその中で、イスラエルの神ヤハウェは申命記32章のモーセの歌、詩篇82章を論拠にしてヤハウェの神は一時期、カナンのエールに下にある、エールの複数ある子神の一人であったということも主張します。これはアリスフェルトというドイツの学者が、すでに



申命記の箇所を解釈しております。紀元前7世紀末から6世紀にかけて、とりわけ捕囚期にかけて、イスラエルのそれまでの家族共同体が崩壊していく過程の中で、今まで神々の世界が家族と重なる形であったものが、妻を持ち、子を持つ、親を持つ神々の世界が消滅していき、神々の会議だけが残り、会議の主宰者である至高神エールの立場にヤハウェが立っていく。そこでイスラエルの一神教は成立していくという一神教の成立過程を見ているわけでありませぬ。

紀元前9世紀、8世紀の遺跡から出て来る碑文の中にヤハウェとアシェラが出てきます。まず **Khirbet el-Qom** というユダの墓地から出てきた石板に刻まれたヘブライ語の碑文をご紹介します。そこには真ん中に手のひらが掘られている。これは墓に入ってはだめだということか、神の守護の手か、祈りの手か、いろいろ議論があります。その碑文に当時のヘブライ文字で次のように刻まれています(資料1 ヤハウェとアシェラ: **Khirbet el-Qom** 墓碑文 参照)。「アビヤフー」はこの碑文を書いたか、奉献した人物のようです。アシェラとは誰かが、碑文が発見されて以来、議論になっています。

ところがさらに南のシナイ半島に入るところですが、**Kuntilet' Ajurud** の遺跡から複数のものが出てきます(資料1 ヤハウェとアシェラ: 壁碑文3 参照)。テイマンのヤハウェは例えば旧約聖書アモス書の最初の方にヤハウェはテムンからとございますが、それと関係しているようです。この碑文でもヤハウェとアシェラが並べられている。それからさらに、同じ **Kuntilet' Ajurud** から出土したピトスという土器の壺の腹の部分に書かれた手紙の碑文が2つございます(資料1 ヤハウェとアシェラ 参照)。これは手紙を書き写したもののようですが、「[]が言った」というのは差出人です。「[]に言え」は口述筆記ですから宛て名です。『私はお前たちをサマリアのヤハウェと彼のアシェラによって祝福した』という部分が手紙の内容です。さらに、もう一つの碑文に

も「テイマンのヤハウェと彼のアシェラによって」というのが出てきます(資料1 ヤハウェとアシェラ参照)。

つまり複数の碑文にヤハウェとアシェラが並んで出てくる。しかも「彼の」アシェラと出てくる。アシェラは旧約聖書に四十例出てきます。旧約聖書で異教の祭儀として非難されるわけで、普通はパールとアシェラ、旧約聖書が目の敵にするカナンの豊穡の神パールと、その配偶女神としてアシェラが批判されて出てきます。アシェラはカナンの女神だったわけで、さらにイスラエル以前の時代、さきほどお話ししたウガリット神話では最高神エールの配偶女神として出てきます。パレスチナにアシェラ信仰がどの程度広がっていたかを示すものとして、ウガリット神話をはじめ、アマルナ書簡、タアナク書簡、エクロン碑文、北パレスチナで出土したアラム語碑文などを挙げるすることができます。

どうもアシェラはヤハウェの配偶女神として受け止められていたらしい。問題はアシェラが固有名詞だとすると、ヘブライ語の文法には固有名詞に「彼の」というのはつかないという問題があります。この議論は完全に決着したとはいえませんが、ウガリット文書におきまして「彼のアシェラ」が出てきますので、固有名詞にも属格の接尾代名詞がつくことはあるのではないかと思います。

ある時、アメリカの学会でフリードマンが話して、フロアから「ヘブライ語の文法として『彼の』アシェラは成り立たないじゃないか」と強烈な批判をしたらフリードマン教授は「シェイクスピアを考えてみよう。私のジュリエットと言うじゃないか」と。それで笑いを誘って終わって議論が続きませんでした。そういう問題が残るにしても、アシェラはヤハウェの配偶女神として、おそらく古代イスラエルの人たち、**Kuntilet' Ajurud**はずっと南にありますけれども、書体などから北イスラエルに属するもので、北イスラエルのヨアシュの時代だと言われているが、イスラエルの人々はヤハウェの神は一人では寂しかりうと奥さんをあてがった可能性はあります。時代



は下がりますが、バビロン捕囚時にエジプトに逃れ、エレファンティーネでユダヤ人の共同体を営んでいた人たちが紀元前5世紀にアラム語の契約文書等々を残しております。エレファンティーネではヤハウェの神は一人では寂しかろうとアナトという女神をあてがって、ヤハウェとアナトの両方を祀っていたのであります。

このように、古代イスラエルの時代は、実際には多神教世界だったという論調がございます。事実そうだろうと思います。そうであればこそ、多神教の背景の中で「ヤハウェのみ」という主張が自覚的に起こってきたのであらうと思います。我々が持っている旧約聖書は少数の自覚的なヤハウェ主義者たちが最終的にまとめていった書物を手にしているということではなからうかと思えます。

最後に、イスラエルの一神教の特質としてどういふことが言えるか。神様の数だけを問題にするのは議論として面白くありません。意味もないような感じがします。唯一神教、拝一神教、交替一神教、多神教、いろいろあると思いますが、ある時、ゼミの学生の一人が神信仰は男女関係みたいなものですよね、多神教は一度に複数の女性を愛する人ですよね。そうすると拝一神教は大勢の女性の中から一人の女性を選ぶというタイプ。交替一神教はその時点において常に一人の人を愛するが、時間的に見ると一人の人が変わっていくタイプ。唯一神教は一人の人を愛すると他の女性が女性で見えなくなるというタイプでしょうか。どうでしょうか。そういう感じで見えていくとどれがいいか、それぞれの人の選択権に任されていると思います。唯一神教との出会い、他の女性が女性で見えなくなるような出会いをしたら、その一生は夢のようかなと思いますが、そういう唯一神教という発想で概念を持ち込むな、という説を唱えている人が何人かいます。ブーバー(Buber, M.)がそうであります。イスラエルの神観念は三つの神の統合によって方向づけられたというシュミットなどもそうであります。

以上述べてきたことをまとめますと、第一にイスラエルの唯一神教の成立は一般論では説明しにくい。第二に、古代イスラエルの一神教は王国時代には実際には多神教であり、それ以前に一神教的なものが、どのような形で確立していたのか見極め難い。一神教は初期イスラエルの神観を継承しながらヤハウェのみを崇拝するという自覚的な人たちが、その中に預言者の運動があったと思いますが、彼らが展開し、継承した神観ではなかったかと思えます。それを古代西アジアという大きな脈絡に位置づけてみますと、単純に一神教がエジプトでもなく、バビロニアやアッシリアでもない、政治的に自分たちの普遍性を主張できた国ではなく、絶大な政治権力を持ちえなかった、文化的にもその普遍性を主張できなかった弱小のイスラエルの民の間に生まれた。そこに絶対的な普遍的な唯一神観が成立した。これは人類における宗教史の逆説の一つではないかと思うのであります。その逆説性はさらに波及してまいります。古代イスラエルの人たちが信じた神が唯一の普遍的な神であるとすれば、イスラエルの民は相対化されざるをえない。つまり神の超越性や普遍性が主張されればされるだけ、イスラエルの民の特殊性というものは否定されざるをえなくなってきます。そのへんのところはアモスなどが言う「イスラエルの人々よ。わたしにとってお前たちは、クシュの人々と変わりが無いではないかと、主は言われる。わたしはイスラエルをエジプトの地から、パリシテ人をカフトルから、アラム人をキルから、導き上がったではないか」という視点でしょうか。もっともヤハウェの神の普遍性を主張することによって、イスラエルの神の特殊性が相対化されざるをえない。それを思想的につなぎ止めるために、選びの思想が一つは必要であったのだと思えます。

もう一つは特に預言者の主張との関連で、とりわけ預言者の社会批判においては、モーセの律法もそうですが、社会的弱者に焦点を当てて、そこから発言している。社会的弱者、小さき弱き者の神とい



う性格が、唯一の神の重要な性格として付着された。そのことが実に重要であるように思います。理論的普遍性、唯一性、絶対性、卓越性だけでなく、その普遍的な神が小さいものに目を注ぐというところが、預言者の大きな寄与であったと思います。そのところを抜いて古代イスラエルの一神教は考えにくいのではないかと。ここのところはもう少し丁寧に論じなければいけないと思いますが、古代イスラエルの一神教の逆説性を見据えて論じなければいけないのではないかとというのが、私の結論であります。

ご静聴ありがとうございました。



古代イスラエル唯一神教の成立とその逆説的特質

AT at Doshisha on 13.12.2003

- 1.0 一神教をめぐる宗教史理論と古代イスラエル宗教
- 1.1 宗教進化論
- Tylor, E. B., *Primitive Culture* I, II (1871)
- Wellhausen, J., *Prolegomena zur Geschichte Israels*, 6. Aufl., Berlin 1905 [1878].
- Stade, H., *Biblische Theologie des alten Testaments*, 2 Bde, Tübingen 1905.
- Marti, K., *Geschichte der israelitischen Religion*, 5. Aufl., Straßburg 1907.
- Lods, A., *Israël des origines au milieu du VII^e siècle avant notre ère*, Paris 1969 [1930]
- 1.2 原始一神教説
- Renan, E., *Nouvelles considérations sur la caractère des peuples sémitiques et en particulier sur leur tendance au monothéisme*, JA 5/13 (1859), 214ff.; 417ff.
- Langrange, J.-M., *Études sur les religions sémitiques*, Paris, 1905².
- Lang, A., *the Making of Religion*, London, 1898.
- Schmidt, W., *Der Ursprung der Gottesidee*, 12 Bde., bearb. Aufl., 1926-1955.
- Oldenburg, U., *The Conflict between El and Ba'al in Canaanite Religion*, Leiden: Brill, 1969.
- Cross, F. M., *Canaanite Myth and Hebrew Epic*, Cambridge Mass., 1977 (邦訳有)
- 1.3 一神教＝創唱宗教説
- Greilmann, H., *Monothéismus und Polytheismus*, RGG¹, Sp. 475-479.
- Pettazoni, R., *The Formation of Monotheism* [orig. French in 1950], in Pettazoni, R., *Essays on the History of Religions*, Leiden: Brill, 1954, pp.1ff.
- Balscheit, B., *Alter und Aufkommen des Monothéismus*, BZAW 69 (1938)
- Albright, W. F., *From the Stone Age to Christianity*, Baltimore, 1940.
- Rowley, H. H., *Mose and Monotheism*, ZAW 69 (1963), p.1ff.
- Labuschagne, C. J., *The Incomparability of Yahweh in the Old Testament*, Leiden: Brill, 1969.
- 1.4 風土論的一神教解釈
- 和辻哲郎『風土』（岩波文庫）
- 鈴木秀夫『超越者と風土』（大明堂、1976年）
- Maag, V., *Der Hirte Israels*, SThU 28 81958), S.2ff. (=Maag, V., *Kultur, Kulturkontakt und Religion*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980, S.111ff.)
- 批判：Knauf, E. A., *Nomadischer Monotheismus?*ZDMG, Suppl. 6 (1985), S.124-132.
- 1.5 深層心理学
- Freud, S., *Der Mensch Moses und die monotheistische Religion* (1939)
- Badcock, R. C., *The Psychoanalysis of Culture*, 1980
- 1.5 一神教觀念の再検討
- monotheism, kathenotheism, henotheism, monolatry, polytheism, monotheiotetism
- 2.0 古代イスラエル一神教の成立と外的影響



2.1 古代メソポタミアにおける一神教傾向

Jeremias, A., *Monotheistische Strömungen innerhalb der babylonischen Religion*, 1904 (apud Weidmann, H., *Die Patriarchen und ihre Religion*, FRLANT 94[1968]).

Hartmann, B., *Monotheismus in Mesopotamien?* in Keel, O., ed., *Monotheismus im alten Israel und seiner Umwelt*, Fribourg, 1980, S. 49ff.

Parpola, S., *Monotheism In Ancient Assyria*, in Porter, Barbara N., ed., *One God or Many? Concepts of Divinity in the Ancient World*, The Casco Bay Assyriological Institute, 2000, pp. 165-209.

2.2 アマルナ時代の普遍主義

Gordon, C. H., *The World of the Old Testament*, Garden City, 1958 (esp. ca. V) (邦訳有)

2.3 バルシア宗教の影響

Vorländer, H., *Der Monotheismus Israels als Antwort auf die Krise des Exils*, in Lang, B., ed., *Der einzige Gott: die Geburt des biblischen Monotheismus*, München: Kösel, 1981, S. 84-113 (邦訳有)

Thompson, T. L., *The Intellectual Matrix of Early Biblical Narrative: Inclusive Monotheism in Persian Period Palestine*, in Edelman, D. V., ed., *The Triumph of Elohîm: From Yahwism to Judaism*, Kampen, 1995, pp. 19-30.

批判的見解はすでに

Mayer, R., *Monotheismus in Israel und in der Religion Zarathustras*, BZ NF 1 (1957), S.23-58.

3.0 ヤハウェ一神教：イスラエル神綱の内的展開

3.1 宗教進化論、セム族原始一神教、創始宗教 (1.1-3)

3.2 「ヤハウェ専一運動」

Smith, M., *Palestinian Parties and Politics That Shaped the Old Testament*, New York, 1971.

Lang, B., *Die Jahwe-Allein-Bewegung*, in Lang, B., ed., *Der einzige Gott: die Geburt des biblischen Monotheismus*, München: Kösel, 1981, S. 47-83 (邦訳有)

3.3 申命記と申命記学派

Rose, M., *Die Ausschließlichkeitsanspruch Jahwes*, BWANT 106, Stuttgart, 1975.

Lohfink, N., *Zur Geschichte der Diskussion über den Monotheismus im Alten Israel*, in Haag, E., ed., *Gott, der Einzige: Zur Entstehung des Monotheismus in Israel*, QD 104, Freiburg/Basel/Wien, 1985, S. 9-25.

Zenger, E., *Das jahwistische Werk - ein Wegbreiter des jahwistischen Monotheismus*, in Haag, E., ed., *op. cit.*, S. 26-54.

Braulik, G., *Das Deuteronomium und die Geburt des Monotheismus*, in Haag, E., ed., *op. cit.*, S. 115-159.

3.4 古代イスラエルの多神教的背景

Smith, M. S., *The Early History of God: Yahweh and the Other Deities in Ancient Israel*, New York et al.: Harper & Row, 1990.

「ヤハウェとそのアシセラ」 (資料1)



- Dietrich, M. / Loretz, O., "Jahwe und seine Aschera": Anthropomorphes Kultbild in Mesopotamien, Ugarit und Israel, UBL 9, Münster: Ugarit-Verlag, 1992.
- Binger, T., Asherah, Goddesses in Ugarit, Israel and the old Testament, JSOTS 232 (1997).
- Dijkstra, M., I have blessed you by YHWH of Samaria and his Asherah: Texts with Religious Elements from the Soil Archive of Ancient Israel, Becking, B. / Dijkstra, M. / Korpel, M. C. A. / Vriezen, K. J. H., Only One God? Monotheism in Ancient Israel and the Veneration of the Goddess Asherah, London / New York, 2001, 17-44.
- Zevit, Z., The Religions of Ancient Israel: A Synthesis of Parallaxic Approaches, London/ New York: Continuum, 2001
- Holia, T. M., The Temple of yhw at Elephantine and Persian Religious Policy, in Edelman, D. V., ed., The Triumph of Elohím: From Yahwism to Judaism, Kampen, 1995, pp. 127-142.
- 3.5 「唯一神教」概念の拒否
 Buber, M., Moses: the Revelation and the Covenant, London, 1946 (邦訳有)
 Schmidt, W. H., Alttestamentlicher Glaube in seiner Geschichte, Neukirchen: Neukirchener-Verlag, 1982 (邦訳有)
- 3.6 古代イスラエル唯一神教の「逆説性」
 日本昭男「古代イスラエル唯一神教の成立とその特質」, 竹内整一他編『宗教と寛容』(大明堂, 1993年), 147-171頁

訂正: 3.1 宗教進化論, セム族原始一神教, 創世宗教 (1.1.3) の次に
 3.2 異なる神観の融合もしくは止揚としてのヤハウェ一神教を挿入。以後, 番号を 3.3 「ヤハウェ専一運動」+・・・のように一番ずつずらす。



資料1 ヤハウェとアシェラ

<古ヘブライ語碑文>

Khirbet el-Qom 墓碑文 (前8世紀後半)

אריה העשר סבבה	富めるウリヤフー、彼の碑文、
ברכת אריהו ליהוה	私はウリヤフーを祝福せり、ヤハウェによって、
ומעריה לאשרתה הושע לה	彼の敵どもから、彼のアシェラにより、彼を救え、
לאביהו	アピヤフーによって、

Kuntilet 'Ajurud (前9世紀)

壁碑文2

ברוח אל בת[אשו הרם	[山々のいた] だきにエルが輝くとき
וימס הרם [כרע חזקה	山々は [彼の下の鐘のように] 溶け、
וידם נבנם [בתר בשן	[パシャンの山で] 瘤は砕かれよう、
ושרש איל]	6つが [] に []
לסרכ בעל בים מלח[מה	[戦] いの日にバアルを祝福するために、
לשם אל בים מלח[מה	[戦] いの日にエルの名前のために、

壁碑文3

[ח] ארכ ימם וישכש [י] חנו	彼らの日々を長くし給え、 [彼] らは与えましょう、
[ל] י[יה] קחום ול[] אשרתא	テイマンのヤハウェとアシェラに [・・・を(?)]
[] קחום יהוה דח[] מן	好意を施してください、テイマンのヤハウェよ、

ピトス碑文A

אמר א[] דמך אמר ליהוה[אל] וליעשה ול[] x x ב[] רסח אחכם
ליהוה שפרת ולאשרתה

[] が言った、「イエハル [エル] とヨアシュと [] に言え、『私はお前たちをサマリアのヤハウェと彼のアシェラによって祝福した』と」。

ピトス碑文B

אמר	言った
אמריו א	アマルヨーが、「言
מר לאדני[]	え、わが主に、
השלם את	『あなたは平安ですか、
ברסוך ל[]	私はあなたを祝福します、テイ
יהוה חבם	マンのヤハウェと
ולאשרתה יב	彼のアシェラによって、彼が
ךך וישוךך	あなたを祝福し、あなたを守られるように、
יהוה עם ארני	彼がわが主と共にあるよ
י'	うに、 []
י>	[]



<旧約聖書(40例)>

1. 「アシェラ像 ('aserah kol-'s)」(申命記16:21)
「アシェラ像 ('aserah)」(出エジプト記34:13「石柱 (mazzebot)」と共に)
「アシェラ像 (pesel ha'asrah)」(列王記下21:7)
「アシェラのために布を織る」(列王記下23:7)
2. 「バアルとアシェラ」(士師記3:7)
「バアルの祭壇とその傍らのアシェラ (ha'asrah)」(士師記6:25.28)
「バアルの預言者450人、アシェラの預言者400人」(列王記上18:19)

<シリア・パレスチナのアシェラ崇拝>

1. ウガリト神話(前14-13世紀)
エル - アシェラ (Athrat(u))
バアル - アナト
アシェラ = 「ツロのアシェラ、シドンの女神」、 「海のアシェラ」
2. アムル(前14世紀)
アムル - アシルタ (Asirta)
アムル王「アプディーアシルタ」(アマルナ書簡)
3. タアナク書簡(前15世紀)
「テマの女神」 注: アラム語テマ文書(前5-4世紀)にも言及。
4. エクロン碑文
アシェラ = エクロンの女神(?) = PTGYH「エクロンの君主、パディの息子アキスの女君」?
「アシェラのために」「アシェラに聖なる」「聖なる方(=アシェラ)の命令に従って聖なる」。
5. 北パレスティナ
「エル・ハマンのアシェラ(聖所名)」(ウム・エル・アメド [南レバノン])
出土アラム語碑文, 前3世紀
「アシェラ(聖所名)」(アッコ出土フェニキア語碑文, 前4世紀)